

“チーム山一” 全職員が一丸となって

山元町立山下第一小学校長 齋藤 博

1. はじめに

わたしは教育者として、子どもたち・保護者・教職員、そして地域の皆様に何をしなければならぬか、自分に何ができるのか。3月11日の東日本大震災を経て、わたしは自分の生き方を根本から見直さざるを得ませんでした。不幸中の幸い、本校児童・教職員・保護者の中には犠牲者は出まらなかったが、山元町全体では死者・行方不明者700人近く、全・半壊合わせて2,500棟以上の大災害となりました。本校は6月12日までの94日間避難所を開設し、最大750人以上の方が避難されました。震度6強の巨大地震と津波。思いも寄らぬ避難所運営、そして教育活動との両立。わたしにはこの経験を語り継ぐ責務があると共にこの教訓を今後に生かしたいと思いペンを執りました。

2. 地震発生から避難所開設

(1) 3月11日午後2時46分



【避難所となった本校体育館】

わたしはあの日の午前、地元中学校で行われた卒業式に出席し、立派な卒業生の姿を目に焼き付けていました。午後、少々の事務をこなし職員室入口に立っていたとき、ゴーンという地響きがしたかと思うと、職員室全体が大きく揺れ出しました。一旦収まりかけたと思ったのもつかの間、今度はさらに大きな揺れに見舞われました。職員室のロッカーは倒れ、事務機の引出しは飛び出し、書架の書類は散乱し、足の踏み場もなくなりました。

1年担任と児童は校庭にすぐ避難。わたしもすぐ校庭に跳び出しました。揺れが収まると、他の2～6年児童と全教職員が校庭に避難してきました。出席の全児童（104名）と全教職員（16名）の安全を確認した後、今後の対応について判断。まず、体育館への避難を指示しました。実は本校体育館は、昨年11月に耐震化工事が終了したばかりで、学校で一番安全な場所だったのです。その後、児童名簿と照合しながら迎えにきた保護者に児童を引き渡しました。TV等から災害情報を得ると「大津波警報発令！」。大変なことが起きている！

(2) 本校の被害状況

本校の建物の被害状況は、校舎内の壁や階段に無数の小さなひび割れが生じました。築30年未満で、耐震化工事は終了していました。ただ、校門が傾き校舎裏が数十cm陥没し、また校地西側の遊具付近の築山が地割れしました。校門は石造りで重さ4t。下校途中の児童がそばを通っていたらと思うと、ぞっとしました。その後、校舎は安全との判断が専門家から下されました。

(3) 避難所の運営と実際の様子



【体育館での避難生活】

①初めての避難所運営

地震発生から約2時間、児童は全員引き渡す事はできませんでしたが、保護者とは連絡が取れ、まずは第一段階終了。児童の迎えと同時に、学校周辺からの避難者が続々と体育館に押し寄せました。町役場（教育委員会）とは、まったく連絡が取れません。「避難所開設だ！」空き教室に備蓄されていた毛布50枚を体育

館に運ぶよう指示し、マットを広げ、長机、椅子、ラジオ等を搬入しました。考えられるありとあらゆることを行いました。職員も自ら動いてくれました。避難所開設については16年前の阪神淡路大震災のことは頭では分かってはいても、皆が初の経験です。場当たりのですが、仕方ありません。やるしかないのです。避難者の年齢は、0歳から102歳まで。家族構成や生活経験もまったく異なっています。要望は多岐に渡りました。すべての要望に応えることはできません。できることから、臨機応変に対応しました。町職員や県内外の自治体からの支援に感謝です。

②自校給食の強み

緊急の課題は、第一に「食の確保」。寒さに震えている人、裸足の人。文字通り“着の身着のまま”の人たちです。助かったのは命のみ。財産をすべて失った方も。幸いなことに、本校は自校給食方式でしたので、校舎に「調理室」が併設されています。また、本校周辺は農家の方が多く、たくさんのお米や野菜等食材が持ち込まれました。地元の皆様からの応援の手伝いがあり大変心強かったです。燃料は地元ガス店に依頼し、水は地元から井戸水の提供を受けました。大きな釜や食器もその日のうちに借り受けました。1日目に約500個、2日目には約750個のおにぎりを提供しました。地元出身の調理員2名の八面六臂の活躍で、何とか難局を乗り切ることができました。その後1週間。食材が尽きかけた時、自衛隊からの炊き出しの連絡がありひとまず安心しました。

③緊急校務分掌の発令

700人以上の避難者をどうまとめるか。3日目の朝の打合せで「緊急校務分掌」を発表。「本部」「救急」「食材」「避難所」「校内」の5部門に分け、詳しい仕事内容も指示。しかし、本校は小規模校で職員の絶対数が足りず、地元と避難者からも担当者を出していただき共同体制を組織しました。当面の本部長は地元区長で、わたしは副本部長として職員を動かしました。校内の施設設備に詳しく備品の数や場所も熟知している学校職員がまず動くのは当然ですし、組織としても動きやすいのです。2週間が過ぎ、本部長は避難所代表者、地元区長は顧問という体制に移行しました。

今考えると、この素早い初動とその後のスムーズな移行体制が良かったようです。3週間経過し避難所生活もスムーズになり（しかし、4月上旬でまだ約300人が校内で避難生活）、教職員も一時中断したままとなっていた年度末の仕事、新学期の準備に取り掛かれるようになりました。

④何でもある避難所の生活と緊急舞台の支援

0歳から102歳まで700人以上。2日目には体育館だけでは足りず、校舎1階の3教室を開放。3日目の朝。容態が急変した方の知らせ。教室に急行すると、70歳前後の男性が意識不明で倒れています。養護教諭とわたしとで心臓マッサージと人工呼吸を繰り返しましたが意識が戻りません。数分後、駆け付けた救急隊員（愛知県からの応援）に引渡しましたが、死亡されました。

また、体育館通路を確保するため荷物を移動したことをきっかけにトラブルが起き警察沙汰になった一幕も。その後、町職員等避難所担当の方が配置されてからは、落ち着きを取り戻しました。

⑤本部長のリーダーシップ

学校側と避難所側との打合せは、対策本部（校長室）で3週間ほど毎日行いました。毎日毎日が「課題解決の連続」です。あらゆる要求が出される時に、わたしが大いに学ばされたのは、避難所本部長のNさんの言動でした。避難者からの要望には適切に対応されると共に、町当局にも要求を出していました。また、連絡事項がある場合は、夜、7時から全体集会を開催しました。Nさんの信念は、「今は、皆が自分が一番大変だと思っている。避難者しているからと言って世話になってばかりではいけない。自分でできることは、小さなことでも協力してほしい。ここにいる人は、みんな大きな家族です。」との言葉に表れています。危機におけるリーダーシップを学ばされました。

本校の避難所は、ついに6月12日に閉鎖されるまで衝立や仕切りを必要としなかったのです。

(4) 子どもたちに見た真の「生きる力」

①寺子屋での継続的な学習

本校学区の一部は、学校から東部の常磐線付近にあり、その地域は津波浸水区域でした。避難期間に違いがありますが、多い時で約20名の子どもが体育館で避難生活を送りました。体育館や教室での集団生活となると、子どもたちにもストレスが溜まります。

そこで、子どもたちの居場所作りのため、3月下旬から「寺子屋」を始めました。午前中2時間ほど、校長室での学習と校庭での遊びが中心です。始めは私一人で担当しましたが、後から学生ボランティアに依頼。若い学生たちの思いやりある接し方には、本当に感謝しています。校庭で子どもたちが遊ぶ姿や歓声は、避難されている方から「元気をもらえる」との話をいただきました。

②「生きる力」を見せた子どもたち

避難所での生活は、子どもたちに何をもたらしたのでしょうか。ある子どもは、体の調子が優れないお年寄りの背中をさすってあげたり、夜、トイレに行きたい方に懐中電灯で足元を照らしてあげたりしました。また、支援物資配給の際には仕分けや並べ方、確認などの仕事、食事の配給の手伝いなどをしました。わたしは、そこに真の「生きる力」を垣間見た気がしました。学校と家庭との行き帰りだけでは学べない多くの人たちとの共同生活、触れ合いの中での自主的行動でした。そして、「お世話になった御礼に鼓笛の演奏をして地域を歩きたい」との声まで聞かれたのです。

3. 学校の教育活動と避難所運営との共存

(1) 学校再開に向けての準備

①22年度のまとめ

町教委からの指示で、22年度の授業は打ち切りとなりました。避難所運営が軌道に乗り、学校が支援する側にまわってから、22年度末の仕事に取り掛かりました。中断していた成績評価、通知表の作成、卒業式・修了式の準備などです。そして、3月24日、来賓として避難所代表の方もお迎えし、全校児童参加の下で6年生に卒業証書のみを渡し、引き続き修了式を行いました。式自体は簡素でしたが、式辞にはわたしの思いの丈を盛り込みました。「これからの山元町を支えていくのは、君たちです。復興まで長い道のりになりますが、共に手を携えて頑張ってください」と。

②23年度開始の準備

余震さめやらぬ4月5日、23年度第1回山元町小中学校長会が開かれました。そこで、震災を踏まえた町の「新」教育基本方針が示されました。そこには、「山元町の学校教育の原点は、中浜小学校と山下第二小学校にあり、3.11東日本大震災の現実から復興することの認識を持って臨むことにする」と強い信念が打ち出されました。学校再開に向けての準備は、多岐に渡ります。

①児童数の確定	②児童の心のケア	③児童の住居の確認	④学期の確定	⑤教育課程（行事の変更）	⑥教室の確保	⑦教科書準備	⑧給食の再開	⑨通学路の安全確保	⑩学用品の準備	⑪各種教材の準備	⑫教職員の人事（県費、町費）	⑬保護者への説明等々
---------	----------	-----------	--------	--------------	--------	--------	--------	-----------	---------	----------	----------------	------------

まず、この震災の影響で他校への転出児童はいませんでした。入学予定の児童が1名亡くなりました。町内の保育所が津波に襲われたためです。山下第二小から2名転入し、105名と確定。家族を亡くした児童が数名、実際に津波を目の当たりにした児童もあり、心のケアが課題となりました。愛媛県から派遣されたカウンセラーの支援を受けなどして、丁寧に対応に当たりました。

次に、1～6年生の普通教室は2・3階に上げ、1階の3教室は避難所として開放しました。

4月7日の強い余震の際には、約30名の方が避難してきました。

(2) 平成23年度スタート



【3階プレイルームでの入学式】

例年より2週間遅れの4月25日、平成23年度がスタートしました。子どもたちの元気な歓声が校舎に響きます。この子どもたちに夢と希望を与えるのが、わたしたちの仕事です。式では、世界からの支援も紹介しました。翌26日には、入学式を、体育館が使用できないため3階プレイルームで全児童参加の下、実施。14名の新入生が入学しました。1年生の意欲的な姿に「頑張るぞ!」という意欲が改めて沸いてきました。

4. 学校再開後の様子から

(1) 3. 11を振り返って

学校再開から2か月、震災から3か月が経過した6月中旬。「これまでの動き・対応」の検証の意味で、保護者と教職員を対象に、アンケート調査を実施しました。そこで、浮かび上がってきた大きな課題は、「児童の引渡し」についてでした。今回のような大震災の場合、学校は避難所になります。他校では、児童を保護者に引渡したことが、結果として児童と迎えに来た家族の死に繋がったケースが報告されました。本校でも、一晩自宅2階で過ごしたケースがありました。引き渡すか学校に留置するか、大災害の正確な情報をいかに素早く保護者に伝えるかが課題となりました。

(2) 教育活動の充実に向けて

学校は再開したものの、体育館や校庭が使えないため、子どもの心身に大きな影響が出ました。骨折や捻挫等のけがが例年より多く、常に何人かが包帯を巻いている状態でした。

そこで、6月12日に避難所が閉鎖されてから、町教委にお願いして校庭の整地作業を行ってもらいました。翌週から、体育館や校庭が使用できるようになると、ぴたりとけががなくなりました。

行事面では、1学期実施予定だった遠足と運動会を、2学期に移行しました。また、2学期に予定していた祖父母参観は、被災児童の心情に配慮して中止としました。該当児童の保護者から、感謝の声が届きました。6月以降、大きな課題となったのは、放射能の影響です。プール利用や畑・学級園での栽培活動も中止を余儀なくされました。現在でも、週2回放射線量を測定しています。

(3) 地域との関わりの中で

前述のアンケートで指摘があった「学校と地域の合同災害訓練」の実施に向けて、町総務課から「防災マップ」を取り寄せました。平成16年9月に、本校学区の5地区ごとに作成されたものです。「浸水の恐れのあるところ」「防火水槽」「飲める水」「防災無線」等が記されています。今回を契機に、改めて現場を確認すると共に1枚に集約し全体をすぐ見渡せるよう準備を進めています。

(4) 今後の課題

①避難所や町外から通学する児童への継続的な支援	②就学援助制度による支援	③学習の遅れへの対応	④心のケアの継続	⑤避難所備品の充実	⑥危機管理マニュアルの見直し等々
-------------------------	--------------	------------	----------	-----------	------------------

課題は山積ですが、地道にこつこつと一つ一つ対応していきたいと考えています。全教職員が、危機管理の大原則「誠意」「迅速」「組織」を肝に銘じて動いてくれており、感謝の気持ちでいっぱいです。今回のような大震災の場合、教職員一人一人の的確な判断と迅速な行動が欠かせません。全教職員にスタッフジャンパーと小型ハンドマイク、振動式懐中電灯の3点セットを配付しました。

5. 震災を受け見直した教育活動と新たな課題

未曾有の大震災から避難所運営を経験したことから、教職員の意識は変わりました。各種行事や教育活動の実施に当たって、危機管理面に関する様々な意見が出されるようになりました。

(1) 不審者進入訓練を安全下校訓練に変更

本校では例年9月に「不審者進入対応訓練」を実施していますが、今回の震災を受けて「安全下校訓練」に変更しました。地震の際の合言葉「真ん中へ!」「頭を守れ!」を確認した後、地区ごとに担当教師と集団下校しながら、危険な水路や塀、道路の陥没具合などを点検しました。そして、各地区から出された危険箇所は職員間で共有すると共に、保護者にも現状報告しました。

(2) より充実させた引渡し訓練

次に、10月下旬実施予定の「児童引渡し訓練」も、大幅に見直しました。今回のわたしたちの対応に大きな反省を迫られたからです。例年通り、簡単な引渡し訓練で良いのではないかとの意見に対して、「否、今回こそ十分細部まで吟味検討し実施しなければ」との強い意見が出され、大幅な見直しとなりました。想定を、**宮城県沖でマグニチュード7.0、震度5強の大地震発生**とし、①地震、②第一次避難、③安否確認、④本部会議、⑤メール配信、⑥引渡し実施、⑦避難者対応などと段階を踏んだ計画を立て、役割分担をより明確にしました。地元との共同訓練も考えています。

(3) 半年過ぎての新たな課題

10月上旬。震災から7か月。教育の面でも新たな課題が少しずつ見えてきました。

- | |
|---|
| ①児童の心のケア ②防災教育の「全体計画・指導計画・指導案」(各、小・中・高学年別)
③教材資料(副読本)の作成 ④地域との連携(危険箇所の再点検、合同避難訓練の実施)
⑤関係機関との連携(町教委、町保健福祉課、カウンセラー等) ⑥教師自身の心のケア等々 |
|---|

②地元ならではの具体的な資料を活用しながら、防災教育の在り方を考えなければなりません。
③今回、様々な対応について考える際、民間教育研究所が作成の『学校教育の危機管理』と兵庫県教育委員会発刊の『防災教育副読本(小学校版)』があります。両者とも、阪神・淡路大震災の体験を基に具体的に書かれており、大変参考になりました。今回も、記録の継承が大切です。

6. 2学期の主な行事から

(1) 学校の元気は「復興運動会」から



【本校名物イーグルス音頭】

9月4日の日曜日、運動会を開催しました。心から待ちに待った運動会でした。保護者・地域の皆様に加えて仮設住宅の方々の参加もあり、例年以上に盛り上がりました。津波でテントが流された地区もあり、学校としてすべて準備しました。1学期に出来なかった運動会がまず実施できたことで、「これでやっと学校が動き出した」との実感が沸いたのは、わたしだけではなかったでしょう。地域を元気にするには、運動会が一番です。

(2) 動き出した地元の人たち

待ちに待った動きがありました。本校卒業生のHさんが、「地元を元気にする祭りを、学校で開



【多くの人で賑わった夏祭り】

(3) 学習発表会のテーマは「心の復興」

8月の職員会議で、今年の学習発表会のねらいの一つに「心の復興」を加えることを、全職員で確認しました。そこで、全校合唱曲として「ビリーブ」を選曲しました。また、3年生は劇「いなむらの火」を上演しました。観客の中には「あの日」のことを思い出し、涙する方々も見られました。最後には、友情出演して下さった山下中学校吹奏楽部の演奏で、「上を向いて歩こう」の全員合唱。子どもたちの演技は、参加者に大きな感動を与えました。【3年生の劇「いなむらの火」】



7. これまでのまとめ



【全校児童が描いたメッセージ】

左の写真は、全校児童が描いたメッセージです。本校PTA会長の発案で、大きなシートに寄書きをしました。中心部の「つなげよう 未来の山元へ!!」「心を一つに」の言葉の周辺に、一人一人が復興への熱い思いを綴りました。「がんばろう山元」「決してあきらめない」「緑いっぱいの山元町に」など、今の自分の気持ちやこれからの町づくりへの期待などが書かれています。8月に開催された地元小平地区の夏祭りで展示されたのが初めてですが、10月の学習発表会でも会場に掲示しました。また、町の広報9月号でも表紙に取り上げられました。現在は、12月上旬です。あの震災からまもなく9か月が経とうとしています。仮設住宅や山元町外から通学する児童が約5分の1おり、復旧・復興はまだまだこれからです。これからも、ネバーギブアップの気持ちを持ち続け、全児童・全職員が一丸となって一步一步確実に進んでいきます。保護者・地域の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

◎最後は人と人とのつながり！つながることが力を生む！

読み聞かせボランティアの庄司アイさんは、家ごと約2km流されるという恐怖の体験をしましたが、震災から2か月経った5月上旬、震災後初めて来校されました。「子どもたちの前で話しているうちに、前に進む気持ちになった」と話されました。

そのことから、学校は人が寄り添うことで、人の気持ちを変える場でもあると痛感しました。